

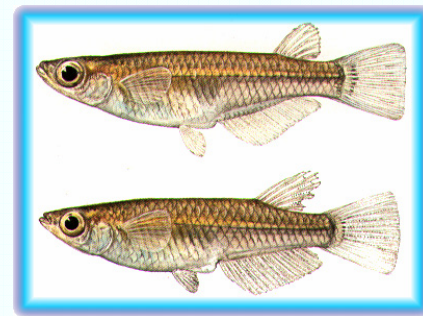
メダカの棲める池作り

1. メダカについて

最近、メダカの姿を見かけないようになりました。子どもたちに聞けば、「メダカはオレンジ色の小さなサカナで、熱帯魚の一種」だと言う。確かにヒメダカは熱帯魚屋で売っています。また、川の入江で見かける小魚の群れをメダカと称する大人も多くなりました。たいていの小魚は「オイカワ」の稚魚です。現実の話、メダカは貴重種になってしまったのです。

メダカは メダカ科
 メダカ属
 メダカ *Oryzias latipes*

と分類されるサカナです。稲作地帯に広く分布することにちなんで、イネの属名オリザが採用されています。メダカは塩分耐性に優れ、太平洋の真ん中で遊泳しているのを発見したとの記録もあります。分類学的にみれば、やはり貴重な魚類です。右上の写真を見れば明らかなように、淡水魚と言うよりはむしろ海産魚的です。

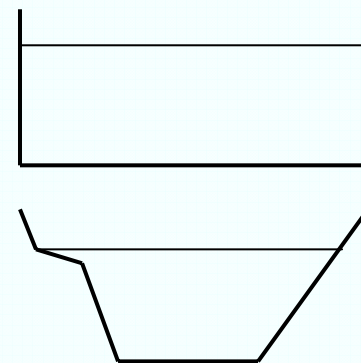


上(メダカ): 下(メダカ)
原色 日本淡水魚類図鑑 より

2. メダカの棲める環境

よく誤解されますが、最近メダカが姿を消したのは、水質が悪化したからだと思われるようです。勿論水質はある程度良いに越したことはありませんが、あまりきれいな水にはエサになる生き物が多く棲めませんので、メダカも多く棲めません。要するに、メダカの減少原因を水質悪化と直結して考えてはいけないということです。

メダカにとって最も大事な環境は
適度な浅瀬があること
産卵場としての適度な水草があること
流れが緩やかであること
年間を通じて水が涸れない、または逃げ場があること

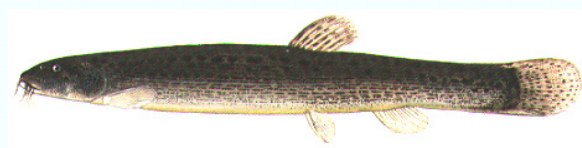
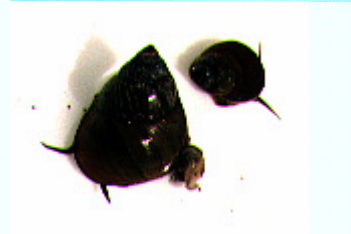


です。このようなごくあたりまえの環境さえ整っていれば、メダカは『貴重種』にならなくてすんだのです。でも、このような環境は最近めっきり減りました。右の図は最近の水辺環境の変化を簡単に示したものです。水路として考えると、上の方が優れていますが、メダカの棲める形は下のような形です。

3. メダカの学校のなかまたち

ここ 20~30 年の間に里山や田園地帯から姿を消しつつある生き物はなにもメダカだけではありません。以前はあたりまえだったのに、最近珍しい生き物には、【ホタル】、【タガメ】、【ザリガニ】、【カワニナ】、【タニシ】、【ドジョウ】、【フナ】等が挙げられます。また、水路の多くがコンクリートに変わったため、【カヤツリグサ】や【フサモ】、【ハゴロモモ】などの水草も水辺から消えました。勿論、大きな生き物以外にも、カゲロウ幼虫やミジンコその他の小型の生き物も減っています。メダカはなにも、一種類で生きているわけではなく、ある時は他の生き物に食べられ、ある時は他の生き物を食べて生きているわけです。このように、小さな生き物から大きな生き物までが食べたり食べられたり、またもちつもたれて生きている状態を、『生態系』と言います。仮にメダカを増やして小川に放しても、この生態系がしっかりできあがる環境でなければ、自然のメダカは帰ってきません。メダカにとっても、また他の生き物にとっても、最も大切なのは『生態系』なのです。生態系は小川を抜け出して、鳥や動物や海の生き物を巻き込み、やがては我々人間にまでおよんでいます。

そうです、我々人間も『メダカの学校の一員』なのです。



4. メダカを殖やしてみよう(注意その1) 遺伝子の問題

ヒメダカはダメ！！

街のペット店で売っている『ヒメダカ』は自然のメダカではありません。むやみやたらに川に放してはいけません。キンギョも元はと言えば『フナ』です。デメキンに川に放す人がいないのと同じことです。

大きな山の反対側からメダカを持ち込まないこと！！

少し難しい話ですが、日本のメダカは厳密に言うといくつかの系統に分けることができます。遺伝子に違いがあるのです。特に、高い山が連なる反対側のメダカとこちら側のメダカでは、距離が近くても遺伝子が大きく違う可能性があります。殖やしたり放したりするための『親メダカ』は地元の水辺で探しましょう。

5. メダカを殖やしてみよう(注意その2) 同居する生き物の問題

水面を覆いつくす水草は禁物

メダカを飼うには水草が必要ですが、【ヒシ】、【ホテイアオイ】、【ボタンウキクサ】のように、夏の間水面を覆いつくすような水草は色々な点で不便です。また、水面が空気と触れない状態を作ると、酸素不足の原因になります。水草は【カヤツリグサ】のような抽水植物と【ハゴロモモ】、【フサモ】のような沈水植物の組み合わせで考えます。

肉食の生き物はいれない

メダカを飼育する時に、メダカ以外の生き物を入れる時は注意が必要です。特に肉食の【ナマズ】や【ウナギ】を入れると、すぐに食べ尽くされてしまいます。同時に入れる候補としては【ドジョウ】、【タニシ】があげられます。トンボのヤゴも発生してきますが、これはあまり問題にはなりません。

6. メダカを殖やしてみよう(注意その3) 飼育容器の注意と工夫

一部に網をはる

比較的小さな容器を用いる場合は、容器の全面または一部に丈夫な網をはります。【猫】や【鳥】の害から守るためです。

オーバーフローに注意する

雨などで容器がオーバーフローすると、孵化した稚魚が流れてしまいます。夜は特に親メダカも鈍いので、よく流されます。水位は容器の8割程度になるように注意するか、工夫が必要です。

7. 池造りのポイント

メダカを飼育・観察するための池の構造は、キンギョやコイの場合と少し異なります。

浅瀬を作る

一つ目に大切な工夫は、浅瀬です。浅瀬は、水草を生やすためと、メダカの休憩場所として必要です。

水草を植える

浅瀬にはカヤツリグサのような抽水植物を植えます。メダカにとって安らぎの場所である浅瀬は、同時に危険な場所でもあるわけです。

排水方法を工夫する

池からの排水を、池のへりからオーバーフローで流すと、稚魚ばかりが親までもが流れ出ます。工夫の方法はいろいろありますが、最も簡単な方法は図のような方法です。

